

## 願浄土真実行文類二（一）

高田短期大学学長 栗原 廣海

前回で「教文類」を終了しましたので、今回から「行文類」に入りたいと思います。

「教文類」には冒頭に、  
謹<sup>つしん</sup>で浄土真宗<sup>じょうどしんしゅう</sup>を案<sup>あん</sup>ずるに、二種<sup>にしゆ</sup>の回向<sup>えこう</sup>  
あり。一は往相<sup>おうさう</sup>、二は還相<sup>げんさう</sup>なり。往相<sup>おうさう</sup>の回向<sup>えこう</sup>  
について真実<sup>しんじつ</sup>の教行信証<sup>きやうぎやうしんしやう</sup>あり。

と述べられていました。つまり、浄土の真実の教えとは何かを考えてみると、二つの阿弥陀如来のおはたらきがある。一つは、阿弥陀如来が本願力をもって自らの徳をふり向けてくださることによって私たちが浄土へ往生させていただく（往相）おはたらきと、ひとたび浄土に往生すれば、人々を救済するためにふたたびこの世に還らせていた

### 諸仏称名の願

浄土真実の行<sup>じょうどしんじつぎやう</sup>  
選択本願の行<sup>せんじやくほんがんぎやう</sup>

となっていて、東本願寺本では、「真実」と「本願」が後から加筆されています。この細註が、最終校定のものと考えられますので、これに基づいて考えてみたいと思います。

この標願と細註は、「浄土真実の行」は法然上人が明らかにされた「選択本願の行」で、それは第十七願の「諸仏称名の願」に誓われていることが示されていると行うことができるでしょう。

「選択本願の行」について、法然上人は、『<sup>せん</sup>選択本願念仏集<sup>せんじやくほんがんねんぶつしゆ</sup>』の「本願章」に、阿弥陀如来は、勝劣の観点と難易の観点から、他の行に勝れ、修し易いがゆえに、第十八願に誓われた称名念仏一行を選び取って本願とされたことが述べられています。

だく（還相）おはたらきである。そして、私たちが浄土に往生させていただくおはたらきについて、真実の「教」「行」「信」「証」があると述べられていたのでした。

「願浄土真実行文類二」は、往相の回向についての「真実の行」が明かされる巻であるということになります。

### 一、標拳の文

「教文類」と同様に、最初に標拳<sup>ひょうこ</sup>の願文<sup>がんもん</sup>が示されます。

諸仏称名の願<sup>しよぶつしやうみやう</sup> 真実の行<sup>しんじつぎやう</sup>

上の標願に対して下の「真実の行」の部分は細註と呼び習わされていますが、この細註は、専修寺所蔵の真上人書写本、いわゆる高田本の細註です。聖人真蹟のいわゆる東本願寺本と、西本願寺本では、

しかし親鸞聖人は、「浄土真実の行」である「<sup>せん</sup>選択本願の行<sup>せんじやくほんがんぎやう</sup>」が、第十七願である「<sup>しよぶつ</sup>諸仏称名の願<sup>しよぶつしやうみやう</sup>」に誓われているとされたことがこの標拳の文には示されています。第十七願は次のように誓われています。

たとい、われ仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、わが名を称えずは、正覚を取らじ。

（たとい私が仏になることができたとしても、十方世界の無数の仏がたが、南無阿弥陀仏と名号を称えてほめたたえることがないならば、仏になりません）

すなわち、諸仏をして名号を称えさせ、ほめたえさせることを誓って成就し、成立した行が浄土真実の行であり、第十八願に誓われた称名念仏であるとしておられるのです。

### 二、浄土真実の行

「行文類」は次の文から始まります。

謹んで往相の回向を按ずるに、大行あり大信あり。

「教文類」冒頭に述べられた「往相の回向について真実の教行信証あり」を受け、ここでは、阿弥陀如来が私たちを浄土に往生せしめる回向のはたらきとしての「行」が、これと不一不異である「信」とともに、「大行」「大信」として示されています。「行」や「信」までもが阿弥陀如来からの賜りものであるとして「大行」「大信」と言われています。

一般的な仏道では、教えを受け、学び、修行してさとりにいたります。このような仏道においては、仏から賜るのは、「教」のみであつて、それに基づいてみずから発願し、教えを信じて修行し（行・信）、さとりに至る（証）のですから、「行」と「信」と「証」は、自己自身の責任に帰

具足の念仏について、そのたやすさを、法然上人は法語のなかでさまざまに語って、往生できない人はだれ一人としていないことを強調しておられます。

これに対して、煩惱成就の末法の凡夫は、到底真実の心をもつことはできないとして、親鸞聖人は、「行」も「信」も「証」も、すべて阿弥陀如来より回向される、つまり、これらが弥陀からの賜りものであるとされたのでした。衆生の行・信ではなく、如来からの賜りもの、すなわち、仏の行であり、仏心そのものであるから、「大行」「大信」と言われるのです。そしてそれによって、末法のすべての人々が救われ、仏になる道を開かれたのです。

### 三、大行とは何か

次に、「大行」について明かされます。

大行はすなわち無碍光如来の名を称す

することになります。このような仏道においては、たとい仏道への思いがしつかりしていても、修行が浅ければさとりに至ることはできません。また、仏道への思いが浅ければ、修行はできませんから、さとりを得ることは不可能です。仏教の時機である三時思想で言えば、教・行・証ともにそろった「正法」の時機に対して、前者は証が廢れた「像法」、後者は行・証が廢れ、教のみとなった「末法」ということになりましたが、だれひとりとしてさとれる者がいなくなってしまうこのような時代の人々がすべて救われていく道として、法然上人は他の行に勝れ、修し易い仏道である、弥陀の選択本願の行、称名念仏の道を示されたのでした。しかし、法然上人においては、称名念仏を行ずるのはあくまでも衆生の問題であり、その念仏には、「至誠心」「深心」「回向発願心」の三心が具わっていなければなりません。三心

るなり。この行はすなわちこれもろもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速圓滿す、真如一実の功德宝海なり。ゆえに大行と名づく。

（大行とは、無碍光如来の名号を称えることである。名号を称える大行には、あらゆる善がおさまり、一切の功德がそなわっていて、速やかに功德を衆生に満足せしめる、真如一実の、海のように深く広大な功德が満ち満ちている。だから大行と名づけられるのである）

「大行」とは、「無碍光如来の名を称するなり」と言われます。それはすなわち、「南無阿弥陀仏の名号を称える」とことと言ひ換えることができ得るでしょう。ではなぜ聖人は「南無阿弥陀仏を称すること」とは言われず、「無碍光如来の名を称すること」と言われたのでしょうか。

次回を期したいと思ひます。